

荒谷 卓(あらや たかし)  
生年月日:昭和34年秋田県出身  
略歴:昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。  
海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>



# 日本の戦闘者

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
代表: 荒谷 卓



俺は、秋田県の大館市という田舎で生まれ育った。10km圏内の山川は俺のテリトリーだった。勉強は嫌いだったが運動は好きだったから何でもやった。小学校では、相撲、野球、陸上競技、スキー、ポートボールの学校代表だった。その他に市の武道場で柔道を稽古していた。中学校と高校は、陸上競技部に入り中長距離を専門に走っていた。長い距離を走ってたもんだから体はヒョロかった。しかし、足腰は強いので相撲とか柔道は強かった。後に東芝府中のラグビーチームのキャプテンと監督で全日本を制覇した同級生花岡伸明(現プロラグビーチーム監督)と相撲をしてもブツ飛ばされずに粘ることはできた。それで、高校生の最後は高校ラグビー花園大会の地区予選にウイングで駆り出されたこともあったよ。

大学に入ってから、念願の空手部に入った。正統派松濤館空手だったが、実際にぶん殴り合いがしたくて近くの極真空手道場入門した。千葉県流山支部道場だった。入門するや否やさして組手をさせられたのが、後に極真会館の館長になる松井章圭(当時高校生)だった。ぶっ倒れたりマイツはしなかったが、彼はほんとに強かったよ。日曜日は池袋の本部道場に通った。大山倍達館長が存命の頃だ。

俺は、激しい肉弾戦が好きだった一方で、戦闘者としての精神的強さを渴望していた。大学の極左学生が掲げるでっかいポスターの上に「三島由紀夫研究会」とか「陽明学研究会」というポスターを張り付けて喧嘩していた俺を、恩師西村司先生が「俺についてこい」といって連れて行ってくれたのが、当時明治神宮武道場至誠館の武学師範をしていた島田和繁先生宅だ。島田先生に会うや否や、そのサムライの風貌と人間性に感服した。その先生から「お前は軍人の顔をしているから自衛隊に入れ」といわれ、大学の大手ゼネコンへの推薦入社を蹴って自衛隊に入隊した。

俺は、自衛隊に入隊したのはいいが自衛隊のことは何も知らない。それどころか、三島由紀夫の思想を我が思想としていたものだから



高校の棒倒しの写真。



幹部候補生学校の写真。

ら、「三島を見殺しにした自衛隊めが。俺が正しい日本国軍を創ってやる」ぐらいの気持ちだったので、幹部候補生学校では上官に食って掛かるは、周囲に精神薫陶をするはで、とても厄介な存在だった。とはいえ、知り合った自衛官の面々は皆素晴らしく、自衛隊の訓練はすこぶる楽しかったので真面目に服務するようになったよ。

自衛隊の最初の勤務地は、福岡4師団の旗本第19普通科連隊。当時の19連隊は、全国銃剣道大会4連覇という猛者が集まっていた。俺の信条は、戦闘集団で指揮を執りうるのは、その集団の中の最高の戦闘者であるという自他ともに認める者でなくてはならないというもの。だから、福岡で小隊長についた時も、弘前で中隊長についた時も、習志野で特殊作戦群長についた時も、部隊指揮官として就任するときはいつでも隊員に「俺に勝てるやつはいるか!」と言ったもんだ。組織からもらった階級で部隊の指揮なんかできるはずがない。命がかかってんだからな。本物の実力集団だったら当たり前のことだ。

ところが、銃剣道は、相当鍛えてもらったが19連隊の猛者隊員に対しては全く歯が立たないどころか相手にもならなかった。さすが本物の戦闘者、こいつらと共に戦えるのかと思ううれしかった。ある日、「小隊長、勝負しましょう」と言ってきた隊員がいた。野田弘3曹、俺の生涯の盟友の一人だ。まずは、駐屯地の倉庫の中の武道場に行ってルール無用のどつきあい。二人とも血だらけになって戦った。これは俺が勝った。次に、どちらが先にへばるかという駆け足。俺は走ることに自信があったが野田は俺より強かった。共に全力で戦って以来、俺と野田は魂の盟友になった。こうやって、本当に一緒に戦える部下隊員との関係をつくりながら小隊の指揮を執った。お互いに尊敬できる戦闘者たち。俺にとって、福岡第19普通科連隊は戦闘者

としての元を作ってくれた「原隊」だ。

次の部隊指揮官は、弘前第39普通科連隊の中隊長だった。俺の故郷大館から最も近い場所に駐屯する部隊だ。故郷に錦の御旗を掲げるような気分。いやがおうにも気合が入って上番した。

上番して早々、指揮関係ができる部下隊員との顔合わせをするのだが、就任式に参加できない部下もいる。臨時勤務と言って、中隊の業務ではなく駐屯地等の特別業務等に就いている隊員たちだ。俺は、その隊員たちにも勤務場所に向いて行って一人一人に仁義をきった。そんな中で、駐屯地の木工所に勤務していた千葉英二3曹に会った。元自衛隊体育学校のレスリング特待生だった彼は、ごっつい筋肉質の体にふてぶてしい顔、そして「なんだお前は」と言わんばかりに斜に構えた態度。俺は、こういうやつが好きだ。米軍海兵隊と共同訓練した時も、千葉に腕相撲で勝てる海兵隊員は一人もいなかった程の剛力だ。千葉本人は、駐屯地の大工仕事ではなく、戦闘者として中隊でバリバリ働きたいという。直ぐに木工所勤務から中隊に戻した。

そのころは、ちょうど銃剣道の中隊対抗競技会に向けて訓練をしていた。俺は中隊長だが、隊員と一緒に訓練した。そして銃剣道の合宿の折、千葉と勝負した。実力は千葉の方が上だったろうがこの時は俺が勝った。それ以降、千葉は斜に構えることを止め正面から「中隊長」と呼ぶようになった。千葉も生涯の盟友の一人だ。

連隊の銃剣道大会では、俺が中隊の大将として出場した。監督曰く「中隊長。中隊長の出番前に勝負をつけておくので心配いりません」。ところが、第1試合から勝負は大将戦になった。監督曰く「勝負は中隊長にかかってますよ!」。こうでなくては面白くない。当然勝った。2回戦も一つ本差で大将戦。「中隊長。負けたらだめですよ」。俺は絶対負けられない。結局、俺は3勝1分けて中隊は優勝。大将としての仕事はできた。福岡19連隊の銃剣道のしごきに感謝した。

続いて持続走大会。例によって俺は言った。「俺に勝てるやつはいるか!」。隊員は「絶対中隊長には負けられない!」と奮起する。花田仁3曹は、俺の大好きな態度のふてぶてしい隊員だ。走力の実力は拮抗していた。練習では、俺に負けると死ぬほど悔しがっていた。競技会本番。花田は自己最高の力を割出して走り、俺に勝った。中隊の隊員の8割以上が自己最高の成果を出した。当然、中隊は優勝した。こんな調子で射撃競技会、冬季戦術競技会等全ての戦闘戦術競技会で優勝した。連隊

長曰く「全部の優勝旗をお前の中隊だけで独占したら他の中隊の士気が下がるだろう」と。俺は答えた。「連隊長。負けてもいい戦争はないでしょう。戦闘者は勝負で妥協はしません」。

中隊の宴会でも俺は言った、「俺より強いやつはいるか!」。さすがに200名の部下を相手に一人一人とさして酒の勝負をすと潰れた。帰りは担架搬送で帰宅。本当に俺はいい部下隊員に恵まれた。最高の中隊長だった。繰り返すが、戦闘者を指揮するためには、自分がそれ以上の戦闘者でなくてはならない。もちろん、あらゆる戦術すべてで上回るというのは難しい。お互いの実力と本気度を肌で感じあうことが大事だ。どちらが上か下かではなく、上手とか下手とかでもなく、相手の本気さを認めたら相互に敬意を払う。それでいい。

ただし、指揮官である以上絶対必要条件がある。任務遂行に対する情熱、国を守る気概においては絶対にその部隊でナンバーワンでなくてはならないということだ。万が一にも、この点で部下隊員に劣るようなら、すぐに指揮権を譲るべきである。国防の任務に対しての本気度が劣る者は、戦闘の指揮を執るに値しない。

戦闘指揮官は、たとえ一人でも任務を遂行しなくてはならない。だから、共に任務遂行のため命をかけてくれる部下隊員がいてくれ



弘前39連隊の写真(銃剣道競技会制覇)。



福岡19連隊の写真(銃剣道)。

るということに最大の敬意と感謝を払わなくてはならない。そこに、一心同体、生命共同体としての戦闘部隊が出現する。これこそが最強の部隊である。

私は、自衛隊の部隊に勤務している間、最強の小銃小隊、最強の歩兵中隊、そして最強の特殊作戦部隊で勤務できたことは本当に幸せなことだった。その時の部下隊員のことは死ぬまで忘れることはない。

そして我が盟友達に一言いいたい。お前らに出会えたことに真心で感謝する。自衛隊を辞めても日本の戦闘者として国を守る気概だけは持ち続けてくれ。この腐った時代に、お前らの国を守る気持ちこそが日本の宝だから。「おい。死ぬまで俺に負けるなよ。」

空挺団でのこと、特殊作戦群でのことは、また後で話すこととする。



弘前39連隊の写真(全戦闘戦術競技会制覇記念)。



弘前39連隊の写真(市中パレード)。